

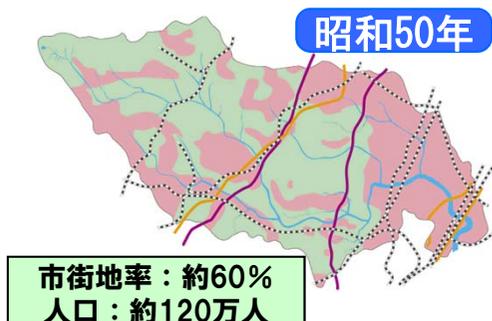
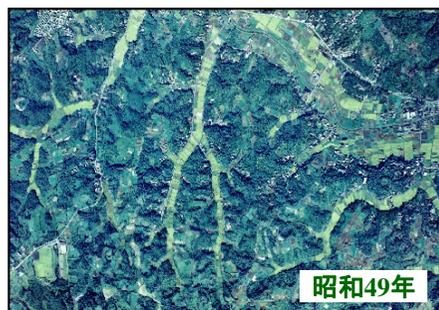
- 鶴見川流域の市街化率は昭和33年時点で約10%でしたが、昭和50年に約60%、平成15年には約85%に達し、都市化が急激に進展し、これまでしばしば浸水被害が発生してきました。(2頁参照)
- このため、鶴見川多目的遊水地などの治水施設の整備を進めるとともに、浸透ますの設置や盛土の抑制等によって流水の保水・遊水機能を確保するなどの総合的な治水対策を講じてきています。(3頁参照)
- 平成26年は、台風等により各地で甚大な被害がありましたが、鶴見川流域では10月の台風18号で戦後2番目の雨量(流域平均2日雨量323mm)を記録しました。平成26年の台風18号では、鶴見川多目的遊水地で154万m³(過去最大)を貯留するなど、これまで講じてきた対策が効果を発揮し、戦後3番目の雨量(流域平均2日雨量307mm)を記録した昭和41年台風4号(浸水戸数11,840戸)より雨量は多かったものの、浸水戸数は6戸でした。(4頁参照)
- 最近は時間雨量50mmを超える雨が頻発するなど、雨の降り方が、局地化、集中化、激甚化しています。今後も流域の関係機関や地域住民等と連携を図り、治水対策を着実に推進してまいります。

鶴見川は都市化が急激に進展し、これまでしばしば浸水被害が発生

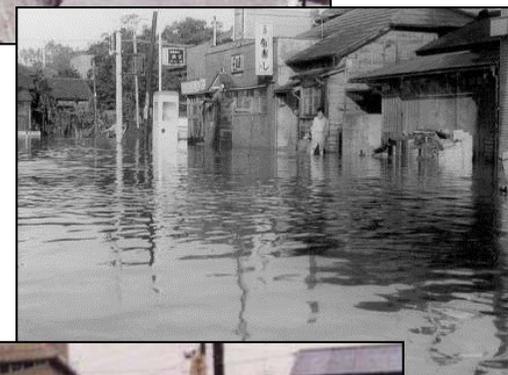
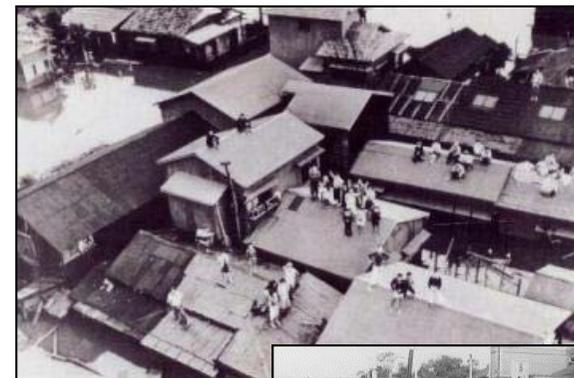
- 鶴見川流域の市街化率は昭和33年時点で約10%だったが、昭和50年に約60%、平成15年には約85%に達し、45年間で約75%増加
- 都市化が急激に進展し、これまでしばしば浸水被害が発生



鶴見川流域



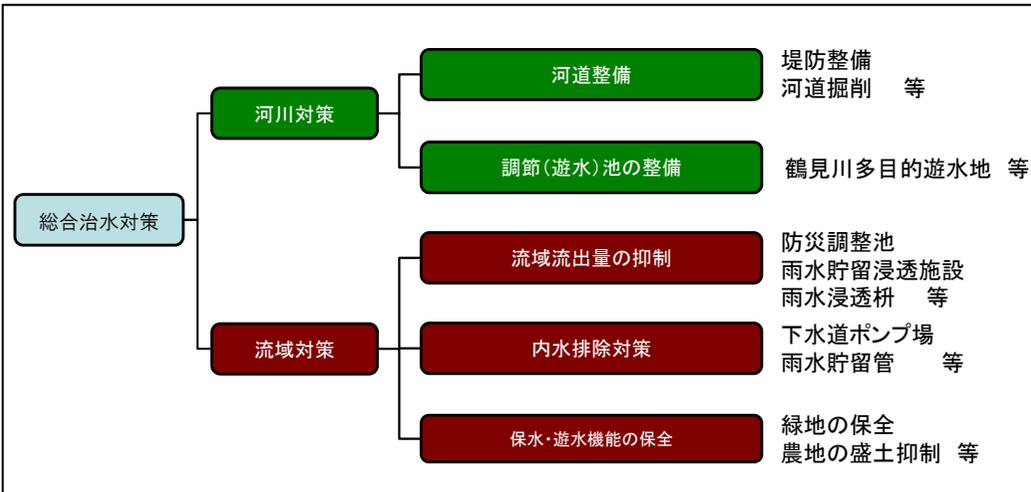
鶴見川流域では都市化が急激に進展



鶴見川流域ではこれまでしばしば浸水被害が発生

鶴見川流域では流域と一体となった治水対策を推進

- 鶴見川流域では、流域と一体となった総合的な治水対策を実施
- 河川においては、河道整備や洪水調節施設の整備を実施
- 流域においては、浸透ますの設置や盛土の抑制等、流域の保水・遊水機能を確保する対策を実施

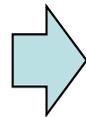
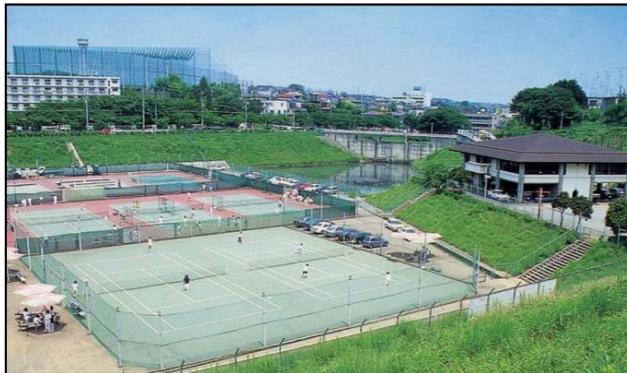


河道掘削により流下能力を増大

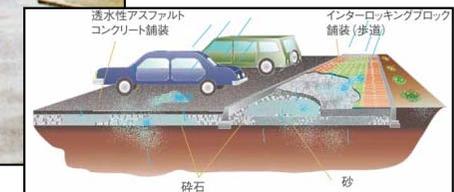


公園事業等と連携し、鶴見川多目的遊水地を整備

鶴見川流域では、流域と一体となった総合的な治水対策を実施



テニスコートを利用して一時的に雨水を貯留

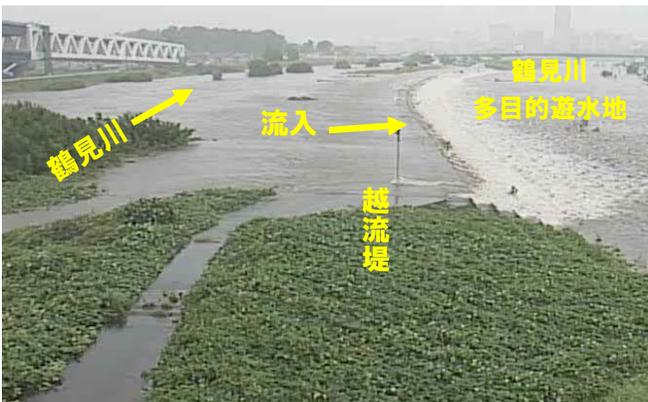
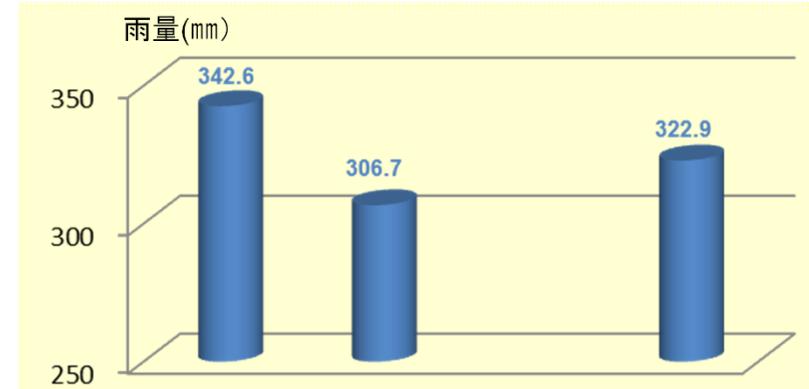


透水性舗装により、雨水を地面に浸透

- 平成26年台風18号では、鶴見川流域で戦後2番目の雨量を記録
- 鶴見川多目的遊水地で154万m³(過去最大)を貯留するなど、これまで講じてきた対策が効果を発揮し、戦後3番目の雨量を記録した昭和41年台風4号(浸水戸数11,840戸)より雨量が多かったものの、浸水戸数は6戸に減少



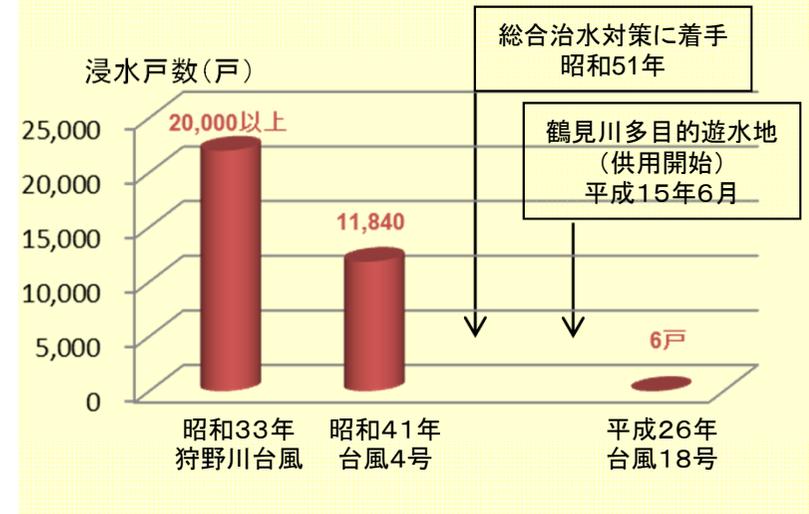
鶴見川多目的遊水地は、平常時には公園等として利用



鶴見川の水位が上昇し、越流堤から鶴見川多目的遊水地に流入



過去最大となる154万m³を貯留した鶴見川多目的遊水地



平成26年台風18号では、昭和41年台風4号より雨量が多かったものの、浸水戸数は6戸

※ 本資料の数値等は速報値であるため、今後の調査で変わる可能性があります。
 ※※ 雨量については、流域平均2日雨量。
 ※※※ 洪水の形態は、降雨の時間分布や地域分布等による影響を受けますが、本資料では流域平均2日雨量で比較しています。